



もうひとつの見方

- 奈良の障害のある人の表現 -

もうひとつの見方

- 奈良の障害のある人の表現 -

はじめに

近年、障害のある人の多様な表現が各地で紹介されるようになりました。社会での関心や評価が高まってきていることを実感する機会も増えています。しかし、こうした表現について、美術史的にこれまでにない、つまり美術の“外側”にある特別な表現といった視点で語られることが少なくありません。ただ、こういった語り口だけでは、作品を語り切ることはできないのではないのでしょうか。

私たちは「芸術文化を通して幸福で豊かな生活を営むことは、すべての人の権利である」という考えのもと、さまざまな活動に取り組んできました。アートというものが「作品」だけではなく、作者の存在そのものや行為、人間の関わり合いのなかにあるものとしてとらえられないか。またアートという切り口で見たときに、障害や福祉に対する思い込みや価値観を変え、一人ひとりの人間がもっている豊かさや可能性に気づくことができるのではないかと考えています。

アートの見方は自由です。自由な表現に対して、受け止める側ももっと自由でよいのではないのでしょうか。それぞれが真摯に表現を楽しむことが、人間としての感性や想像力、主体的に生きる力を育むことにつながります。そのことが地域の豊かな文化をつくり、その豊かな社会がふたたびユニークな表現者を育てていく——文化の良き循環をつくるのが大切です。アートを見ていると、自分がそれまでもっていた考え方とは別の感覚を見つけることもあります。そのような見方は、新しい自分を発見することにもつながるのではないのでしょうか。

本書では奈良県内の障害のある作家、10人の表現を紹介します。周囲との関わりによって作品を制作している人、存在と表現が限りなく近い人など、個性的な人たちが登場します。作品や表現の多くは日々の生活に流れる豊かな時間のなかから生まれるということが、創作の風景からも伝わるでしょう。あたたかさを感じるか、クールな印象か、美醜を超えた語り得ぬものか——自分と地続きな“何か”を感じるかもしれません。あなたなりの「もうひとつの見方」で、お楽しみください。

一般財団法人 たんばぼの家

奈良の障害のある人の表現活動の現状について

奈良県では障害者福祉施設や市民団体、行政などが主体となり、障害のある人のアート活動をサポートし、発表の機会をつくってきました。2011年度からは、奈良県が主催する「奈良県障害者芸術祭HAPPY SPOT NARA」がはじまり、コンセプトに基づいた作品展示や商店街や寺社などで地域や市民を巻き込み表現をシェアする機会をつくっています。定期的な発表の場ができ、それを目標に作品制作をする人が増えました。また、国内外で活躍するアーティストが福祉施設などで共同制作をしたり、障害のあるアーティストが学校を訪れ生徒たちと交流したりするなど、奈良県全体で福祉の枠を超えた文化芸術による地域活性化が起こっています。

2014年秋、奈良にて「障害とアートの相談室」を開設、この取り組みから、相談窓口や研修、発表の基盤が整いました。相談室が各地の活動をつなぐネットワークのハブの機能を担い、障害のある当事者や福祉施設で働く職員や家族の意識も変わりつつあります。また美術や教育、NPOなどの市民団体が障害のある人たちの表現活動に参画することにより、より開かれた状況が生み出されています。障害のある人の表現が、いまを生きる同時代の表現として、奈良における芸術文化の活性化も担っています。



奈良県
奈良県は東大寺、法隆寺、平城宮跡など、特に日本のなかでも最古の歴史的遺産が各地に点在し、国内外からの観光客が多い観光都市として知られています。また墨や筆などの伝統産業、ニット、靴下などの繊維産業が盛んなところです。大阪や京都など周辺都市のベッドタウンとして人口増加地域がありますが、地理的な条件から都市機能が北部、中部に集中し、南部の山間地域との格差が大きいのが特徴です。奈良国立博物館や奈良県立万葉文化館など、歴史的な視点、古美術や文化財などの紹介に重きが置かれていますが、近年では市民が主体となって寺社などの観光地や商店街を舞台に社会資源を活用したコミュニティアートプロジェクトを行うなど、奈良独自の芸術文化活動が発展しています。

表現が生まれる場と見る視点

岡部太郎、森下静香 [一般財団法人たんぼの家]

障害のある人の芸術文化活動は、日本では特に1990年代に入って大きな展覧会が開催され、注目が集まってきました。もちろん、それまでも個々の福祉施設や作業所、養護学校などで芸術文化活動は行われてきましたが、美術として評価される作品や活動はわずかでした。1990年代以降、美術館での障害のある人の作品による展覧会、2000年代以降には地域での障害のある人も参加するコミュニティアートプロジェクトが行われるようになり、いまでは全国の多くの福祉施設やアトリエ、個人の活動から、魅力的な作品や活動が生まれています。また、活動を行うことが障害のある人の生きがいとなり、生活の質を向上させることにつながることで、ひいては社会参加や仕事づくりにつながるということが、認識されつつあります。

このように、この25年間ほどで障害のある人の芸術文化活動を行う環境は飛躍的に増え、社会的に高い評価も生まれています。しかし、その障害のある人の表現や作品に接する側、見る側の多くは、もしかしたら従来の固定的な見方、一方的な見方で見ているのではないのでしょうか。

私たちは、これまで障害のある人の表現や作品に触れ、その生まれる現場を訪れるたびに、作品の背景には、障害のある人の内発的な成長を促す場の力や関係性の豊かさがあることを実感してきました。また、作品が紹介、展示され、美術として社会のなかに出ていくときに、その現場にある魅力や関係性、豊かさがそぎ落とされ、美術という枠組みから見ることで、特別な作品として語られることに疑問をもってきました。それは、福祉という制度のなかで、障害のある人たちの生活や権利が守られ保護される一方で、どうしてもサービスの受け手として受動的な存在にならざるをえない構造と通じる部分があるのではないのでしょうか。もちろん社会のなかで制度は必要であり、専門性があるからこそ、できることがあります。

しかし一方で、分野を横断し、専門家と市民の垣根を越境するからこそ、生まれてくるような知や美のあり方があるとも考えられます。

いま、障害のある人の表現が生まれる場では、一様には括ることのできない考えや活動があり、担い手があります。美術で語られる背景とは別の、もうひとつの物語やありよう、可能性を知ること、改めて作品自体を違った視点から見直すことができるのではないのでしょうか。そこから、これまでとは異なる何かを受け取ることができるかもしれません。

ここでは、私たちが障害のある人の表現を考え、社会に伝える活動を行うにあたり、価値観の軸を示してくれた6つの文章を紹介します。それらの文章を手がかりにして、障害のある人の表現と向き合うとき、また表現が生まれる場を考えると、新たな思考や解釈の仕方、そして自分たちの活動の行く先についての確認を行ってきました。それらの文章とともに、私たち自身の考え方や実践をふりかえり、私たち自身のもうひとつの見方について考えていきたいと思います。

アートの存在意義

私はアートの現代的な存在意義は、アートのために囲い込まれた場所ではなく、アートとは縁のなさそうな場所にこそ見いだされると考えている。そもそもアートは社会生活の様々な断面に寄り添い、日本においても、ハイアート(高級芸術)が席卷する以前の社会では、日々の暮らしのなかにアートは根づいていた。しかも、いわゆるアートを発祥させたヨーロッパにおいても、アートは美に奉仕するだけではなく、日常の雑多な願いや祈り、欲望や救い、果ては呪いなどと密接につながっていた。いまのスマートで小綺麗な美術館やホールを見ていると、アートに付随するそ

んな意味深き混ぜものが削ぎ落とされているような気がする。

中川眞,『アートの力』, 和泉書院, 2013年, p.1

例えば、閑散とした商店街を会場にして障害のある人の関わるアートプロジェクトを実施していると、夕食のにおい漂う路上で、ふと不安に思うことがあります。この作品はここにあるべきなのだろうか。自分たちは一体何のために何をやっているのだろうか。それぞれの人がそれぞれの理由で行き交うまちかどで、この小さな表現に込められた力と価値がどれだけ伝わるだろうか。そんなときに励まされるのが、本書です。一見、場違いと思われる状況にこそ、アートをもち込む。これまであった見方ではなく、その状況で起こる感情に素直になる。さまざまな人が自由に価値づける。権威にすげらずオルタナティブであること。周縁が変わることで、中心も変わっていく。そもそも中心という概念そのものがなくなっていく。オルタナティブこそが本質であるかもしれません。誰かの表現に対して敬意をはらいながらも、創造的に読み違えたり、積極的にこれまでにない使い方をしていく。そんなことがあってもいいのです。それはアートによってそれまで気づくことさえなかった「声なき声」を聴いた人の特権であり、その人なりのやり方で次の誰かへバトンを渡す責任があるからです。その過程でアートにかけられた「意味深き混ぜ物」が多様であるほど、豊かな文化が生まれるのだと思います。

生活と暮らしのなかから生まれる表現

時々症状に一喜一憂しながらも、日々の暮らしは容赦なくやってきます。むしろ、強い薬の力で朦朧

としていたときのほうが何も考えなくてすんだかもしれない。全く大丈夫ではないけれど、今日も生きている。薄明りのなかの揺れ動く営みにも、当事者のつらさや人としての魅力が潜んでいると思うのです。そんな「おかしみ」を伝えていきたい

新澤克憲,「ハーモニーが『新・幻聴妄想かるた』を完成。『2匹目のどじょう』か?『世紀の大傑作』か?」,『精神看護 2014年7月号(通常号)(Vol.17 No.4)』, 医学書院, 2014年, p.35

世田谷でこころの病とともに過ごす人たちの日々を自らの言葉と絵で綴った「新・幻聴妄想かるた」を製作したNPO「ハーモニー」。代表の新澤克憲さんは、彼らの病そのものではなく、病すら呑み込んでいく「生活」に着目しました。「彼らは24時間365日間、ずっと患者でいるわけではなく、むしろ生活者としてのおもしろさを伝えたかった」そうです。障害のある人の表現活動は、表現行為の結果としての作品が注目されがちですが、存在そのものや生活のなかにこそ、人間の存在の不思議さや本質というものが的確に提示されることがあります。福祉施設や教育現場など、人と向き合い、人に寄り添う職場にいと、ある瞬間に思いもよらなかった創造性が生まれる瞬間に出くわします。それらの多くは、かたちに残ることはなく、その場に居合わせた人たちの記憶のなかにしか留まらないことがほとんどです。かたちとしての輪郭や強度はなく、儚いものかもしれませんが、それらを留めることで、その場になかった第三者とも共有することができます。そして、私たちの終わりのない日常における価値転換が起こるのです。障害のある人の「存在と生活のアート」の第一発見者は、常に一緒にいる家族や職員です。逆に言えば、そういった身近にいる人の感度によって成立したりしなかったりするもののなのです。人がどんな状況にあっても、たとえその人の存在がすでになく

なってしまったとしても、生の「おかしみ」を味わう手段はいくらでもあるのです。

ケアにおける専門性

ケアの専門性は専門性としては特殊である。なぜなら、それは職業を超える職業であらざるをえないからである。ここで「聖職」と言いたいのではない。そうではなくて、専門家というあり方にとどまっていたら、その専門性がなりたたないのである。言いかえると、ケアにおいては、相手にとってほんとうに良いほうへそのひとの状況を変えてゆくということが、つまりそのひと自身の問題、その特異性の前で、状況に応じてみずからの専門的知識や技能を棚上げにすることができるといことが、その専門性として要求されるのである。

鷺田清一、『思考のエシックス ― 反・方法主義論』, ナカニシヤ出版, 2007年, p.243

障害のある人のケアの現場、高齢者のケアの現場、そのようなケアの現場で、いわゆる専門職の人しか使わないような言葉だけで話す人を見ると、違和感を感じることがあります。もっといつもの、自分たちが生活で使うような日常の言葉で話したらいいのに、と。食事の場面で使われる「摂食」や「嚥下」という言葉。生活の状況を聞き取りまとめていくことを表す「アセスメント」という言葉。生活に根ざした言葉とは異なる「福祉用語」です。時間や量ではかられ提供される公的な福祉サービスが制度で保障されることで、生活が安定できることは望ましい。けれども、人が人として生きていくことを支えるためには、どれだけ制度が充実しても、必ず制度から漏れ落ちるものもある。人と人が対するなかで生まれる葛藤や心の

ゆれ、支援する側と支援される側が入れ替わるような反転の経験……。人と人との関係が濃密に表れるケアの現場では、資格を取得しさえすれば専門家になれるのではなく、専門的知識や技術を棚上げできるということが必要です。人間の生きることを支える、そして幸福をかたちづくっていく福祉の現場、ケアの現場だからこそ、人として、人に関わるという当たり前のことを心に留めておきたいのです。

障害は人と人との関わりのなかにある

そして「世間」ということでは、星子が暮らせる条件は、世間が単純にならないこと、思い詰めて一つの方
方向へ走り出さないことである。星子は見えない、しゃべらない分だけ、空気に敏感でささくれ立った心
やおためごかしに身体反応を起こす。星子の居場所には静謐ではない穏やかさ、騒然ではなく雑然、熱
気ではなく澁まぬ活気が求められる。

最首悟,「今を生きるいのちに寄り添う」,『市民の意見 No.146』, 市民の意見30の会・東京, 2014年, p.14

星子さんが通い、はたらく、横浜の地域作業所カブカブは、高齢化が進む団地のなかにあり、喫茶や創作活動ができるアトリエを運営しています。ときには店先でバザーを開くこともあり、そのコミュニティになくてはならない場所です。所長である鈴木励滋さんは、障害を「差異があることよりも、差異があることで差し障りがあったり被害を受けたりすること」と言います。障害は個人に付随するものではなく、関係にある。だから障害者という人がいるのではなく、誰もが当事者であると。喫茶であるカブカブには、いろいろな人が訪れ、はたらき方にとらわれない、さまざまな接客が行われています。そこで

は、一段高いスペースでゴロゴロしている星子さんも接客していると考えられています。星子さんという存在がいて、星子さんに会いにやってくる人がいるからです。その人がそこに存在することが新しい関わりを生み、存在することが仕事になる。既存のはたらき方を揺さぶるような、オルタナティブな関わり合いや存在のありようが障害のある人の生きる場から生まれています。

ホーム

イリイチは、もともとカトリックのお坊さんでした。(中略) 著書のなかで社会全体が学校化しようとしていることを指摘し、それをくい止めようとしたり、医療問題についても、病院が巨大化していくことによ
って人間の命を養う場所が市場の方に吸い取られている、と批判しました。

イリイチが、インドのガンジーの簡素な小屋に行ったとき、自分のなかに癒されるものを感じたとい
います。自分が解放されるものを小屋から感じたのです。イリイチは、それを「ホーム」と呼びます。イ
リイチは基地問題を抱えた沖縄や、公害病患者のいる水俣にも行っています。人々がつながりを持ち、分断された世界にさわやかな関係を築いていくとい
うところに、ホームを見出していきます。

栗原彬,「市民社会とアート」,『アートは社会の未来への投資―トヨタ・エイブルアート・フォーラム総合セッション講演録』, トヨタ自動車株式会社／エイブル・アート・ジャパン, 2003年, p.62

1996年から7年間にわたり、全国34都市63回にわたって開催されたトヨタ・エイブルアート・フォーラムの、総括のトークセッションでの栗原彬さんの言葉です。障害のある人の表現がかたちをとって作

品となって出てくるために、さまざまな人の関わりがある。絵を描く仲間や絵の具やアトリエを用意する人、傍らで見守る人。絵の展示に関わる学芸員やボランティアがいる。その場所に見に来る人がいて、交流が生まれる。一人ひとりが関わりをもっている場所が生まれてくる。その場所を栗原さんは、イヴァン・イリイチが呼んだ「ホーム」になぞらえました。このようなホームが社会のなかにたくさんできていくことこそが、私たちがめざすべき社会のあり方だと考えます。しかし、必ずしもホームだけを肯定し、市場を否定するつもりはありません。経済の効率化や地球規模での情報化がどんどん進む一方、右肩上がりに成長だけをめざしていくことはできないいまの社会のなかで、障害のある人とともにつくるホームの側から、市場に対して提案できることがたくさんあると思うのです。おたがいに相互依存できるようなコミュニティのあり方、子どもや障害のある人、高齢者、女性など多様な能力、個性をもつ人の力を生かすようなはたらき方、大量生産、大量消費、大量破棄とは異なるものづくりのあり方。そして、いま全国各地で障害のある人のアートを基点としホームが生まれ、地域において人が豊かに生きることを助けるアートの役割、価値を提案しています。そこでは、障害のある人は援助を受けるだけの存在ではなく、アートを通して社会を変える役割を担っているのです。

鑑賞

言葉が視覚にとってかわるなどと言いたいのではあ
りません。主観であることを素直に受け入れ、ありのま
まに感じたことを言葉にするだけです。たった一人
で絵と向き合う場合とは、また違った出会いになる

と思います。もちろん徹底した主観的な感覚表現を頼りにしますので、異なるパートナーと言葉を交わせば、同一の美術作品であってもまた違った印象を受けると思います。しかし、それもコミュニケーションの本質です。たった一度、言葉を交わただけでその美術作品のすべてを感じるなどとてもできません。百者百様の感じ方が存在し、それは百通りの真実なのです。百人の言葉が百通りの美術作品を見せてくれると思います。

塩瀬隆之,「五感を総動員してありのままに」,『百聞は一見をしのぐ!?—視覚に障害のある人との言葉による美術鑑賞ハンドブック』,エイブル・アート・ジャパン, 2005年, p.44

今夜僕は散歩にでかける
星は見えているだろうか
そう思うだけで心があたたかくなる

山梨県立科学館で長く学芸員として携わり、星や宇宙の魅力をさまざまなかたちで伝えてきた高橋真理子さんに教えてもらった詩です。この科学館のプラネタリウムを拠点に活動する「星の語り部」というボランティアグループのなかには、多くの目の見えない人や見えにくい人が参加しており、そのなかの1人の全盲の方が書いたものです。私が普段見えていると思いついていても見えていないものがたくさんあること、視覚的には見えていないかもしれないが、その人はもっと深く星を感じ、心から楽しんでいることに、胸が熱くなりました。そして、自分のなかにある世界が広がったら私にももっと見えるものがあるかもしれないと思えました。

「視覚に障害のある人との言葉による美術鑑賞」は、市民グループによる自主的な活動として、また美術館の教育普及活動の一環として取り組まれ、特に2000年代に入ってから各地で広がってきました。

そこで発見されてきたことは、視覚に障害のある人も美術を鑑賞し楽しむことができるということです。さらには、目の見えない人に言葉で伝えようとするときに、見える人もまたこれまでとは違った見方で美術を鑑賞し、違った方法で楽しむことができるということ。誰かと見ることで新しいコミュニケーションが生まれること、さらには美術館という空間が「なんとなく高尚な場で静かに過ごさなければならぬ」といった偏見ではなく、誰もが楽しんでいいパブリックな空間であることなど、その活動はたくさんの方の可能性を示しました。私たちは障害にも、美術にも思い込みや偏見をもっているかもしれません。しかし、出会ってみると、いとも簡単に自分のなかに自分が線をひいて世界を狭くしてしまっていることに気づくことがあります。人が表現することは自由なことで、それを受け取る方も自由に受け取っていい。誰かと見る美術鑑賞はそのことを教えてくれる、ひとつの方法ではないでしょうか。

ここで紹介した文章は、作品を見ることとは一見関係のないように思えるものもあるかもしれませんが、見ることは見ることに留まらず、表現することであり、自ら主体的に関わっていくことであると思います。だからこそ、作品の前に立つとき、多様な見方で、また自分の言葉で語っていいのです。見ることは受け身の行為でも、ある一定の愛好家や専門家のものでもありません。そして見方や感じ方が人間関係や場をつくり、文化をつくっていくことにつながります。「もうひとつ」であることは、主流ではないいくつかの道を示すことであり、オルタナティブであることであり、固定された見方をずらすことであり、そこから新しい価値が生まれてくるのです。あらためて、自分なりの、もうひとつの見方で見てみませんか。

EVERYDAY WORKING ENVIRONMENT

PHOTO: HIDEAKI HAMADA

撮影協力: 社会福祉法人青葉仁会 あおはにの家 / 社会福祉法人在友会フレンズ
まきばめぐり アトリエ創佳舎 / 社会福祉法人わたぼうしの会たんぽぽの家アート
センター HANA



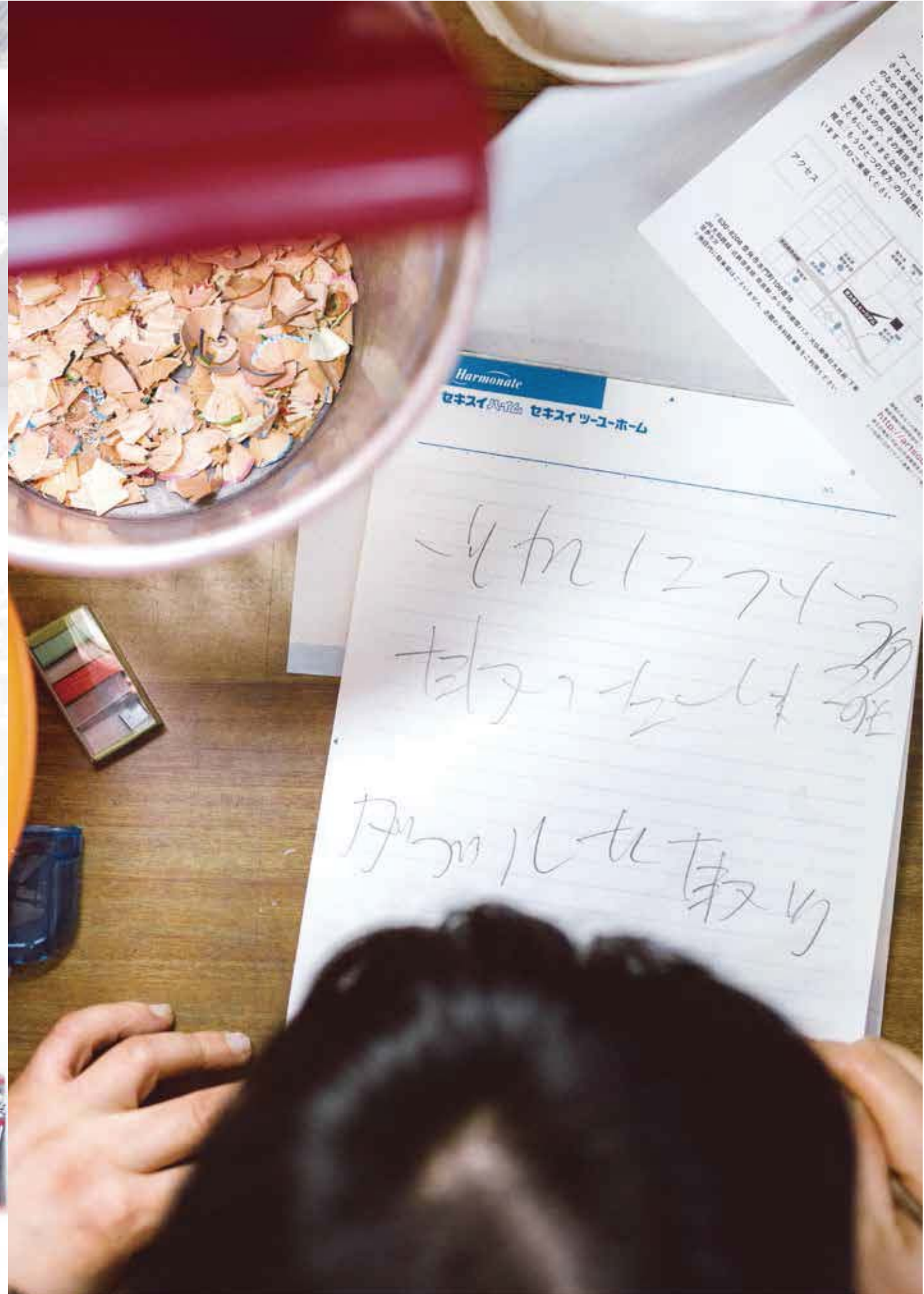
















WORKS

28 | HIDEO FURUTANI 古谷秀男

34 | KOJI YAMAZAKI 山崎康史

38 | MASASHI YAMANO 山野将志

44 | JURI ITO 伊藤樹里

48 | YU FUJITA 藤田雄

52 | DAISUKE WAKASUGI 若松大介

56 | REIKO SAWAI 澤井玲衣子

60 | MAYUMI NAKAMURA 中村真由美

66 | CHIEKO TAKADA 高田千恵子

70 | ATSUKO TAKEDA 武田佳子

※作品は、タイトル、制作年、素材、サイズ(縦×横)の順を基本として記載しています。

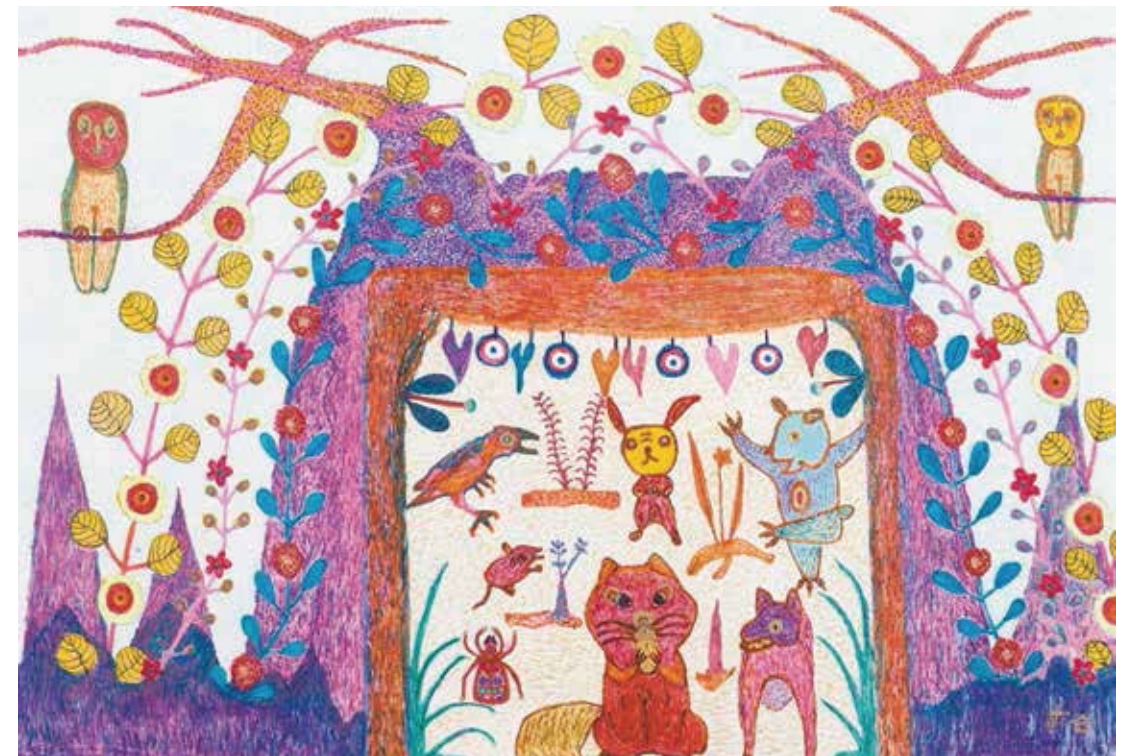
HIDEO FURUTANI

古谷 秀男

1941年生まれ。社会福祉法人大和会 大和高原太陽の家に所属。2005年頃から開拓移民として33年過ごしたブラジルの記憶を描く。ブラジルの風景、農場での生活、また空想の世界を表現する。職員がたまたま持っていたキラキラしたラメ入りのペンを使用し、仕事のあいまに楽しみながら描いている。人を喜ばせるのが好きで、昼下がりにはハーモニカ、夕方には口笛で鳥の鳴きまねをして、時折、本物のホトトギスやカラスが鳴き返すという。

【主な出展歴・受賞歴】

2008年 エイブル・アート近畿2008ひと・アート・まち奈良「GOOD JOB!!『働くこと、遊ぶこと、生きること』」(奈良県文化会館／奈良)
2011年 「アートピクニックー美術をたのしむ」(芦屋市立美術博物館／兵庫)
2014年 「奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2013 - 2014『HAPPY SPOT TOUR!』」(奈良県文化会館／奈良)

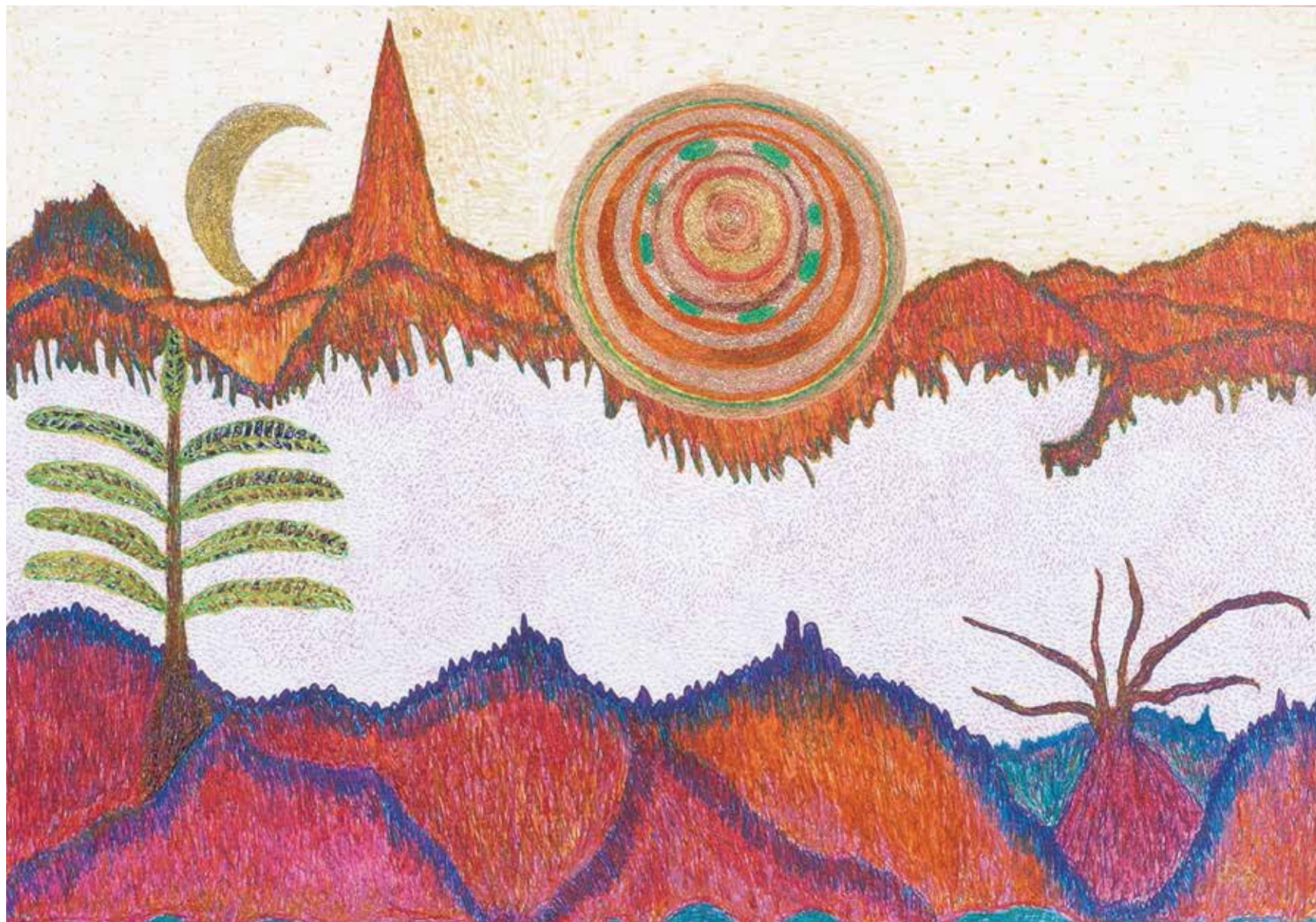


上：タイトルなし／2007年
ペン、紙
265×373mm

下：タイトルなし／制作年不明
ペン、紙
274×382mm



タイトルなし／制作年不明
ペン、紙
279×396mm



タイトルなし／2007年
ペン、紙
268×379mm



上：タイトルなし／2006年
ペン、紙
267×380mm



下：タイトルなし／制作年不明
ペン、紙
272×379mm

KOJI YAMAZAKI

山崎康史

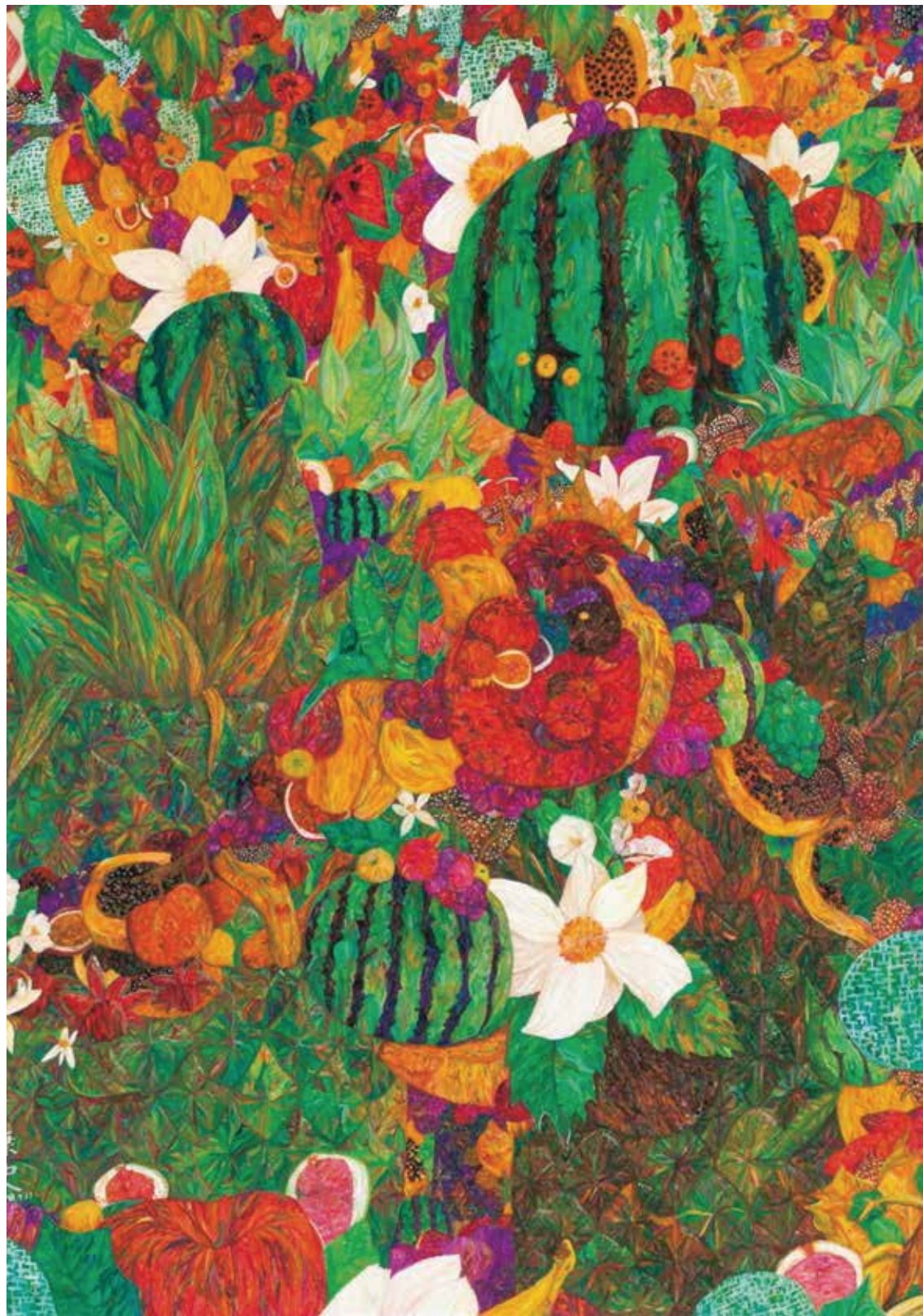
1981年生まれ。小学6年生の頃より自宅で絵画に打ち込みはじめる。油彩や水彩で、画面全体を極細の筆で何度も塗り重ねるオリジナルの画風で描く。モチーフは、身近な素材で季節の果物や家の庭などがあり、また自然をテーマに動物や植物も数多く描いている。1998年より、数々のコンクールで賞を取り、高い評価を受けるようになった。膨大な時間と手間をかけた作品は、宝物として大切に扱っている。

【主な出展歴・受賞歴】

1998年 第11回上野の森美術館「日本の自然を描く展」 入選
2000年 一枚の繪「第16回全国日曜画家コンクール」 銅賞
2003年 第16回上野の森美術館「日本の自然を描く展」 フジテレビ賞
2010年 「山崎康史・個展」(たんぼの家アートセンター HANA ギャラリー／奈良)



《童夢》／2006年
油彩、キャンバス
409×530mm



《果実》／1998年
水彩、紙
370×260mm



上：《チューリップ》／1999年
水彩、紙
270×370mm



下：《庭》／2000年
水彩、紙
265×370mm

MASASHI YAMANO

山野 将志

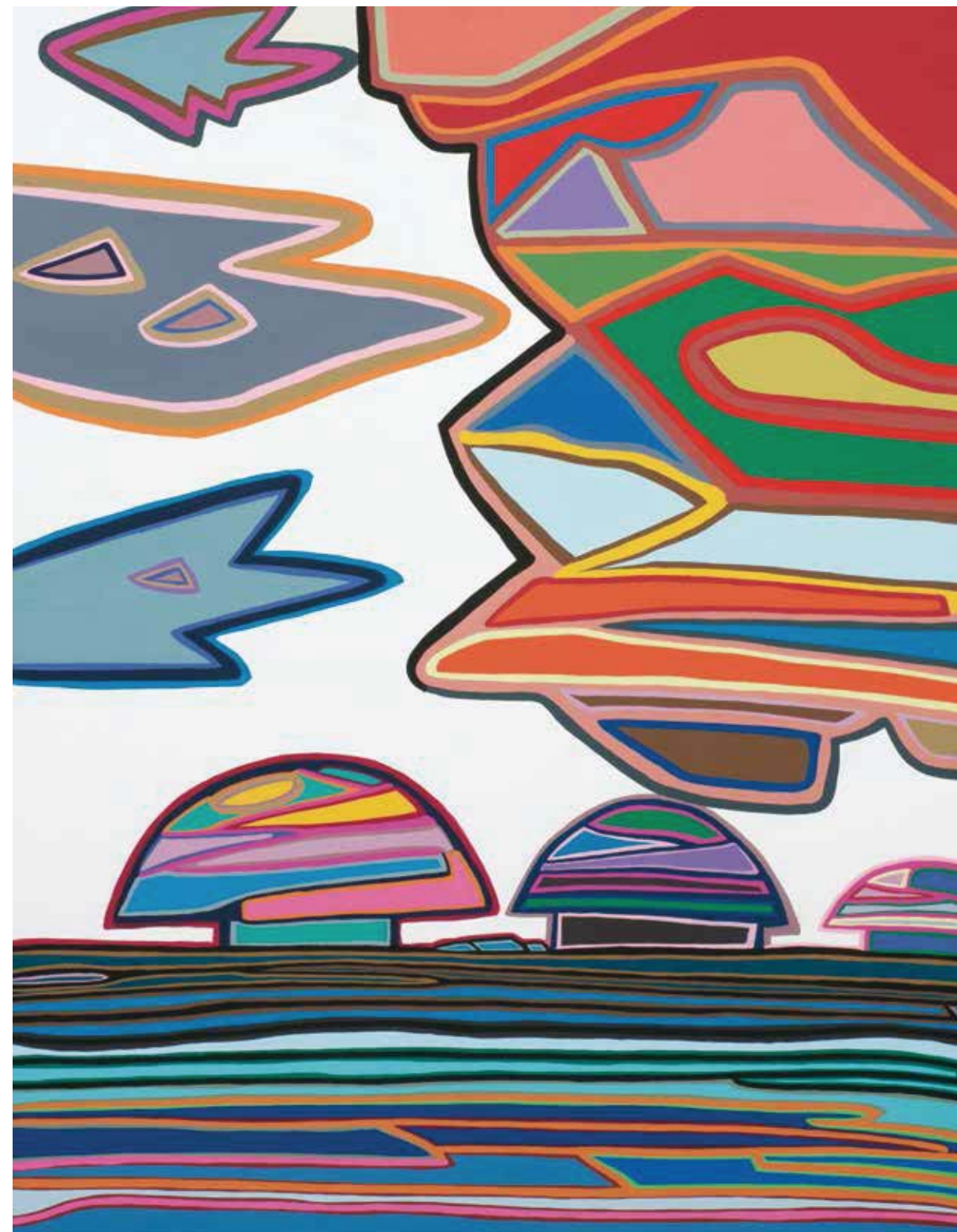
1977年生まれ。社会福祉法人わたぼうしの会たんぼの家アートセンターHANAに所属。植物や動物・昆虫などの生命と対話するように描く。森や空などの自然も全身で感じ取り、力強い線と豊かな色彩を重ねていく。お出かけすること、人とおしゃべりすること、ご飯を食べに行くこと……、すべてが自分を表現する大切なものとしてつながっている。2006年には、オーストラリアに1ヵ月ほど滞在し、アーティストとして飛躍のときを体験した。

【主な出展歴・受賞歴】

2001年 「かんでんコラボ・アート21」 最優秀賞

2006年 「Verge2006」(Brisbane Outsider Art Studio／オーストラリア)

2011年 「ヨリコレミドリ 山野 将志展」(高島屋大阪店・ギャラリーNEXT／大阪)



《海にうかぶ島》／2009年
アクリル、紙、パネル
1167×910mm



《ジャングルのなかの碧い滝》／2009年
アクリル、紙、パネル
910×1167mm



《バグダッドステーション》／2010年
アクリル、紙、パネル
728×728mm



《楽園の海バカリフォルニア》／2010年
アクリル、紙、パネル
653×805mm

JURI ITO

伊藤樹里

1977年生まれ。社会福祉法人わたぼうしの会たんぽぽの家アートセンター HANA に所属。1日4回のラジオ体操、紅茶づくり、「ニュース」書き、薬のカラや鉛筆の削りカス集め、ラジオ深夜便を聞くこと……。好きなこと・やりたいことが彼女の仕事、「JURIX WORKS」である。毎日の気になる出来事や覚えた自慢の漢字を、とめどなくしゃべりながら書く。大好きなラジオにまつわるパフォーマンスも各地で上演している。

【主な出展歴・受賞歴】

2009年 「Art Link Japan」(クリエイティブ・クレイ・ギャラリー／アメリカ)
2011年 「アートピクニックー 美術をたのしむ」(芦屋市立美術館／兵庫)
「SUPERPOSITIVE スーパーポジティブ: 世界への愛着」(日図デザイン博物館／京都)
2012年 「違って独特」(京畿近代美術館／韓国)



《JURIX ラジオ》／2012年
鳥の演劇祭5「カタルシス」にて上演
30min



YU FUJITA

藤田 雄

1971年生まれ。社会福祉法人青葉仁会に所属。制作は彼が安定するための方法でもあり、描くことを生活から切り離すことはできない。散歩の途中で手持ちの紙に描いたり、パジャマに着替えながらペンを走らせたりと、常にたくさんの紙とペンをもち歩いている。好きな言葉や数字を描き、それをもとにして言葉あそびを楽しみ、また描きだす。そんな日常からたくさんの作品が生み出されている。

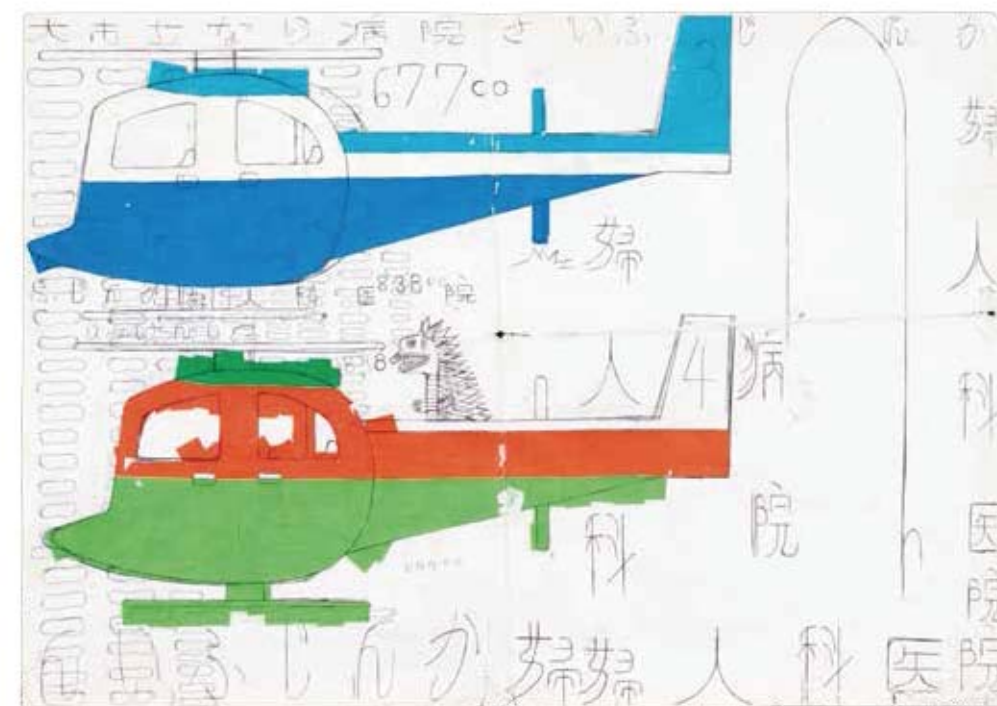
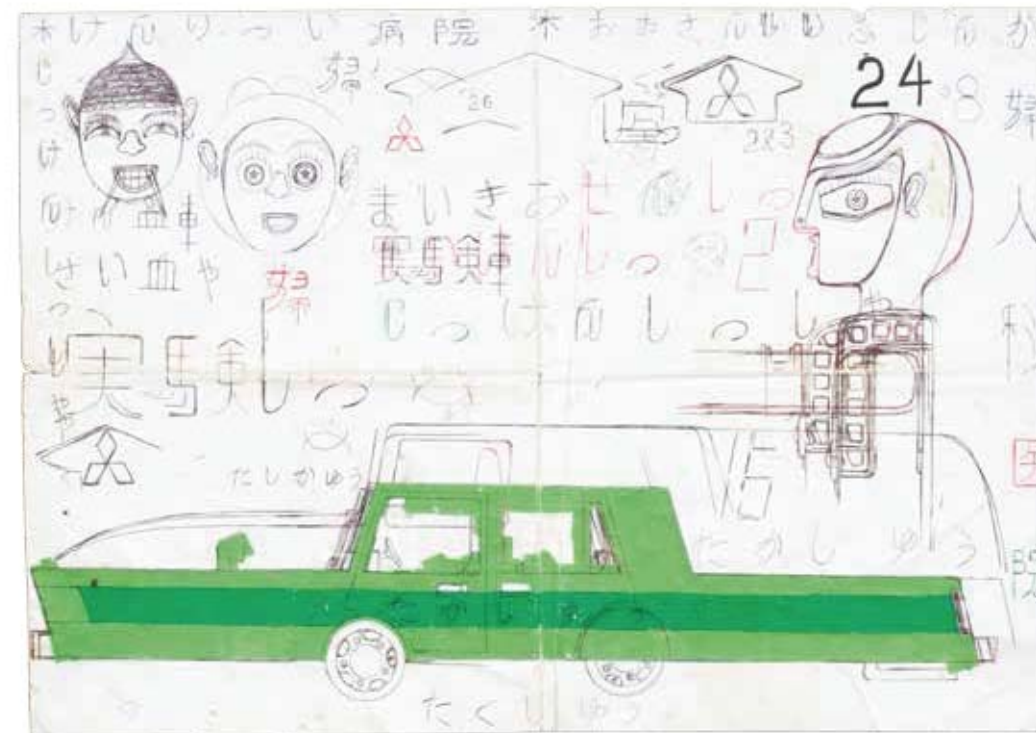
【主な出展歴・受賞歴】

2011年 「ポコラート全国公募」 入選

2014年 「奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2013-2014『HAPPY SPOT TOUR!』」(奈良県文化会館／奈良)

「ポコラート宣言 2014」(3331 Arts Chiyoda／東京)

「ART BRUT JAPAN SCHWEIZ」(ラガーハウスミュージアム／スイス)



上：〈タクシー〉／2009-2013年
折り紙、ボールペン、画用紙
380×540mm

下：〈ヘリコプター〉／2009-2013年
折り紙、ボールペン、画用紙
380×540mm



上:《29のあひるとマンドリル》／2005年頃
ボールペン、クレヨン、画用紙
381×540mm



上:《688のうさぎとばんだちゃん》／2005年頃
ボールペン、クレヨン、画用紙
381×540mm



下:《669のうさぎとばんだちゃん》／2005年頃
ボールペン、クレヨン、画用紙
379×538mm



下:《536のばんだちゃんとうさぎ》／2005年頃
ボールペン、クレヨン、画用紙
380×539mm

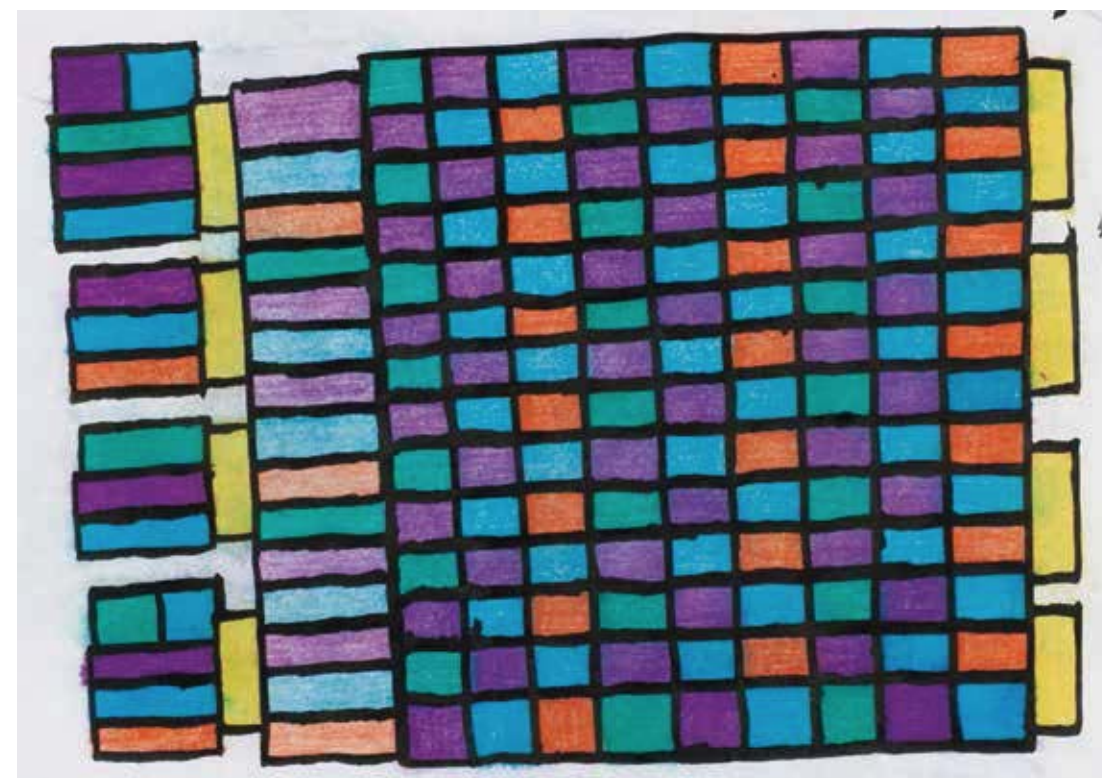
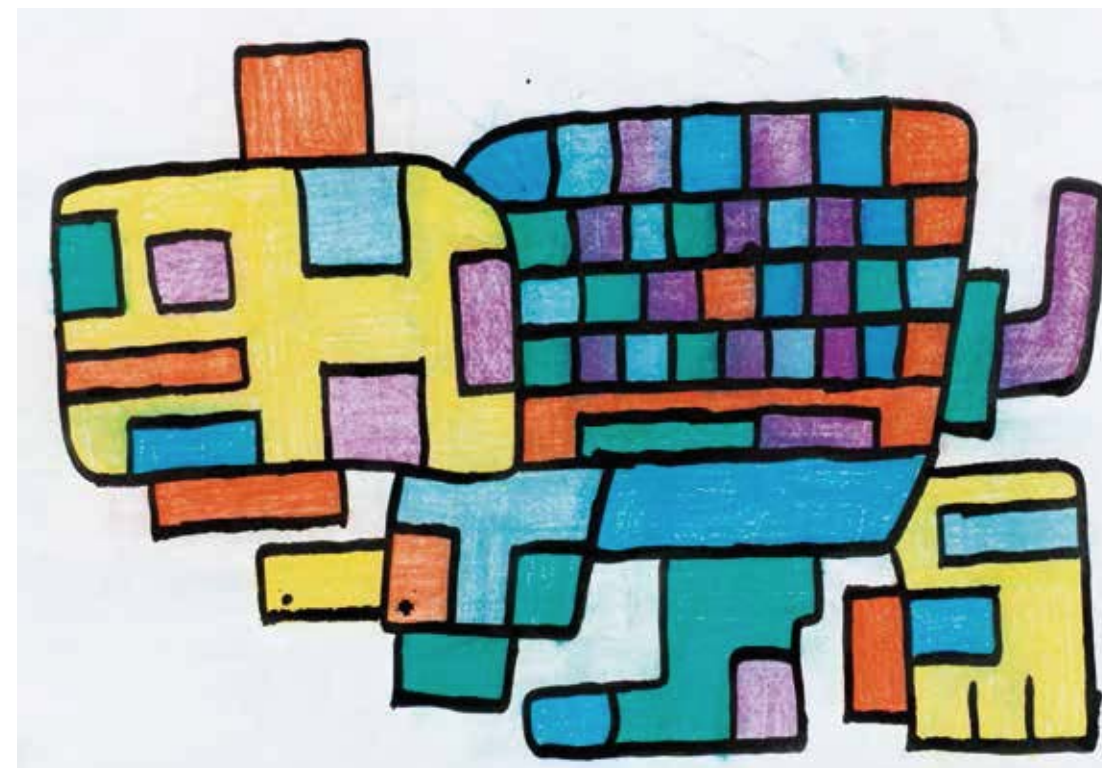
DAISUKE WAKASUGI

若 枚 大 介

1980年生まれ。社会福祉法人青葉仁会に所属。画集や絵本・図鑑からモチーフを選び、模写をする。大胆な構図でモチーフを描き出したり、モザイクのように細かく構成したりと独特の表現で描き出す。とてもきれい好きな彼は、エプロンを着け、ゴム手袋をはめてパステルを握る。絵画制作とは別に、日常のなかでメモ紙に好きな言葉を絵と同じく四角く整えられた字体で書くことにも夢中で取り組んでいる。

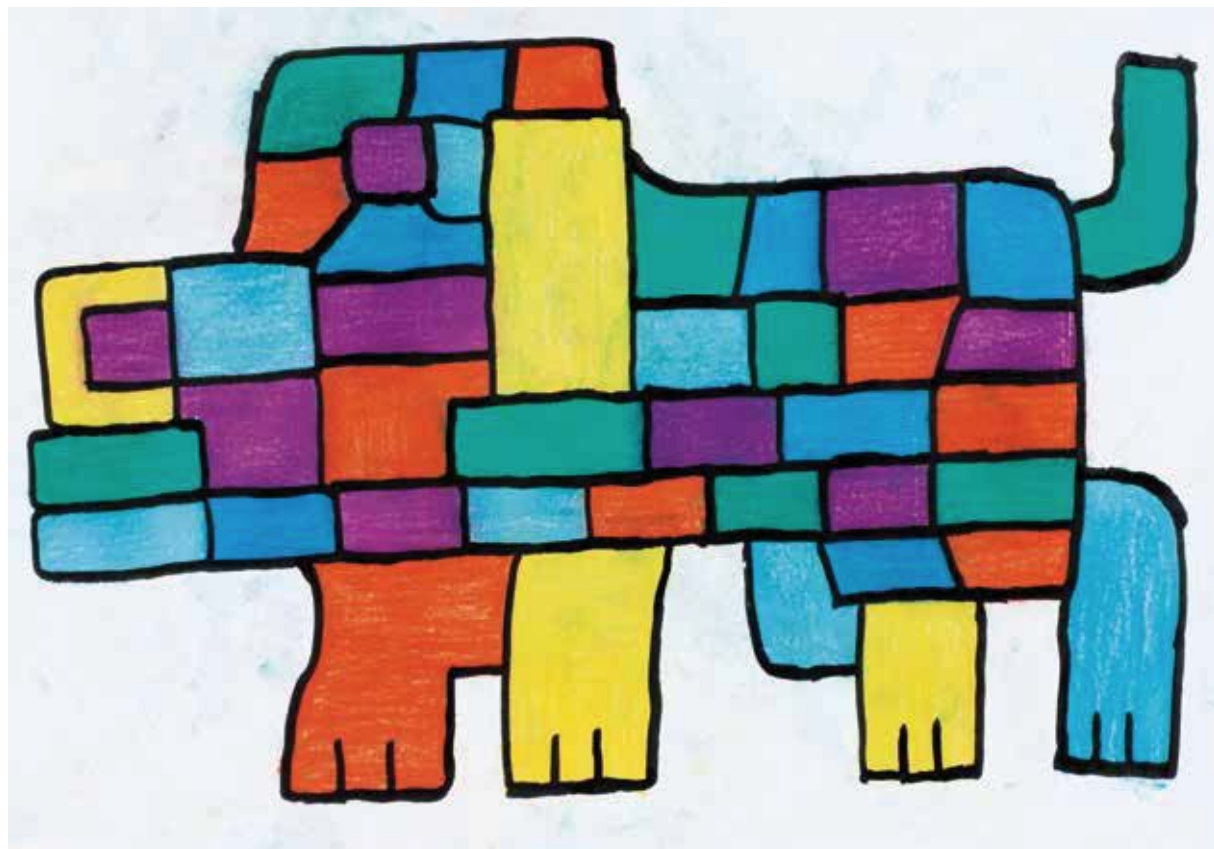
【主な出展歴・受賞歴】

2012年 「アートピクニック vol.2 呼吸する美術」(芦屋市立美術館／兵庫)
2012年 「ビッグ・アイ アートプロジェクト」 入選
2014年 「奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2013-2014『HAPPY SPOT TOUR!』」(奈良県文化会館／奈良)
2014年 「韓・中・日障害者美術交流展」(ソウル市弘益大学現代美術館／韓国)

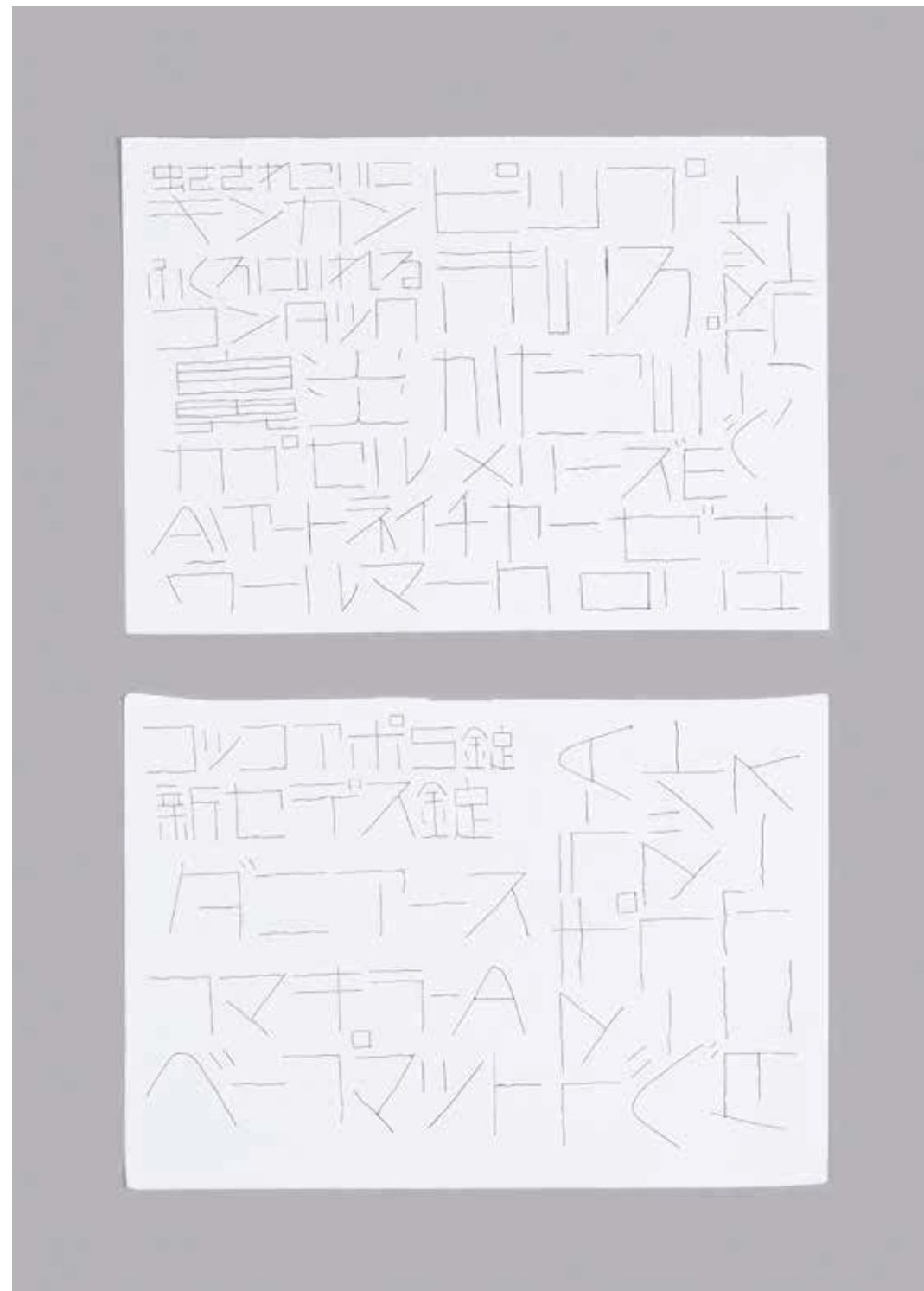


上:《カメ》／2013年
墨、パステル、画用紙
379×538mm

下:《バイナッブル》／2014年
墨、パステル、画用紙
379×538mm



《いぬ》／2013年
墨、パステル、画用紙
379×539mm



《無題》／制作年不明
ボールペン、紙
150×210mm

REIKO SAWAI

澤井玲衣子

1977年生まれ。社会福祉法人わたぼうしの会たんぼの家アートセンターHANAに所属。もの静かな佇まいだが、実は好奇心旺盛な行動派。買い物、掃除に洗濯、料理にお稽古ごとと、プライベートにはいつも予定が入っており、その充実感からか、話しだすと止まらないこともある。こうと決めたら揺るがない芯の強さをもっていて、日常のシーンを題材に描かれる画面には、ためらいのない線や色が、静かに強く走る。

[主な出展歴・受賞歴]

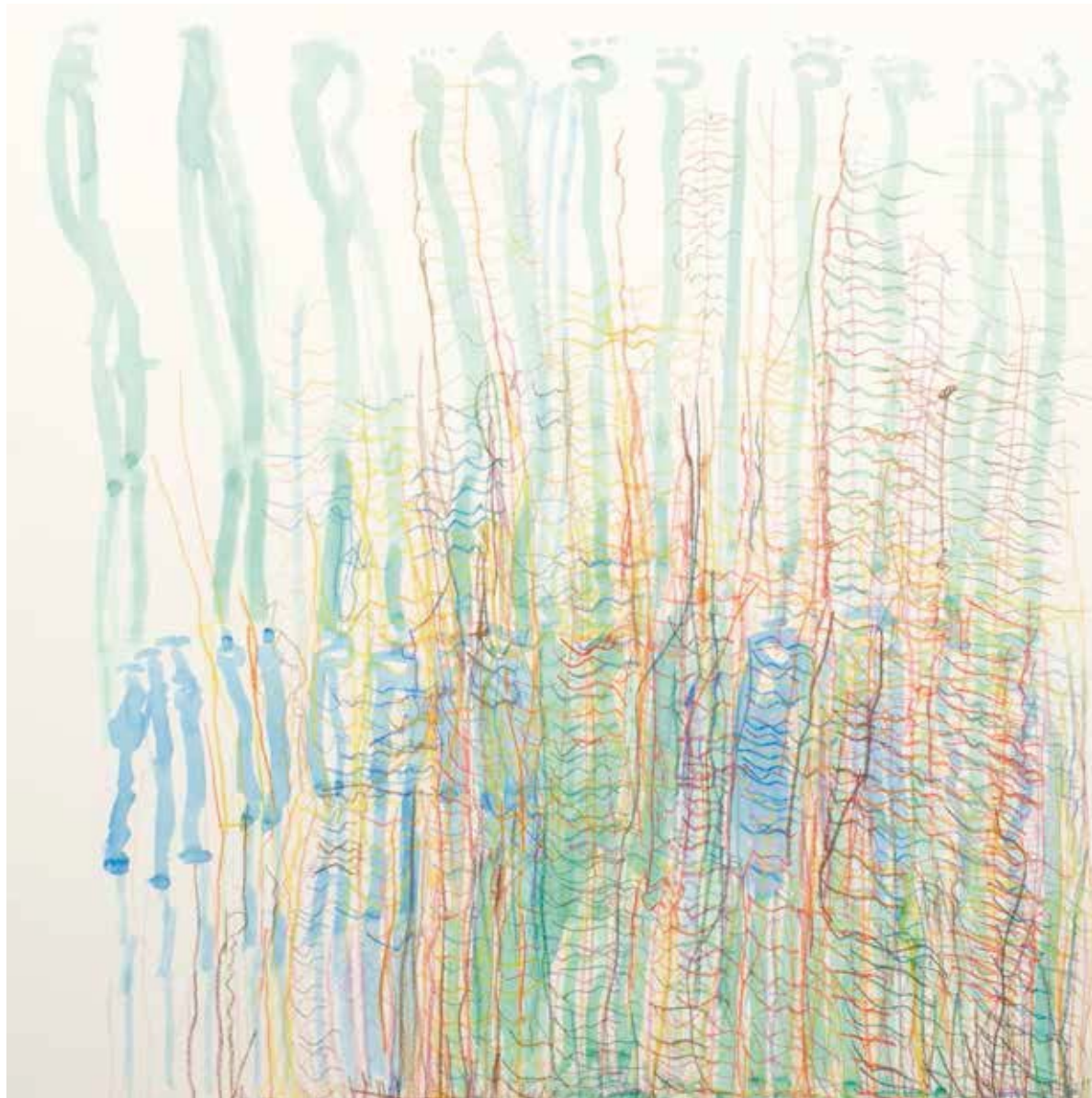
1999年 「このアートの元気になる エイブルアート'99」(東京都美術館／東京)

2003年 「かんでんコラボ・アート21」 最優秀賞

2011年 「アートピクニックー美術をたのしむ」(芦屋市立美術博物館／兵庫)



〈La Tour Eiffel〉／2006年
コンテパステル、透明水彩、紙、パネル
1455×890mm



《すいれんと池》／2008年
コンテパステル、透明水彩、紙、パネル
910×910mm



《Le Musée du Louvre (ルーブル美術館)》／2005年
カレコンテ、コンテパステル、透明水彩、紙、パステル
1455×890mm

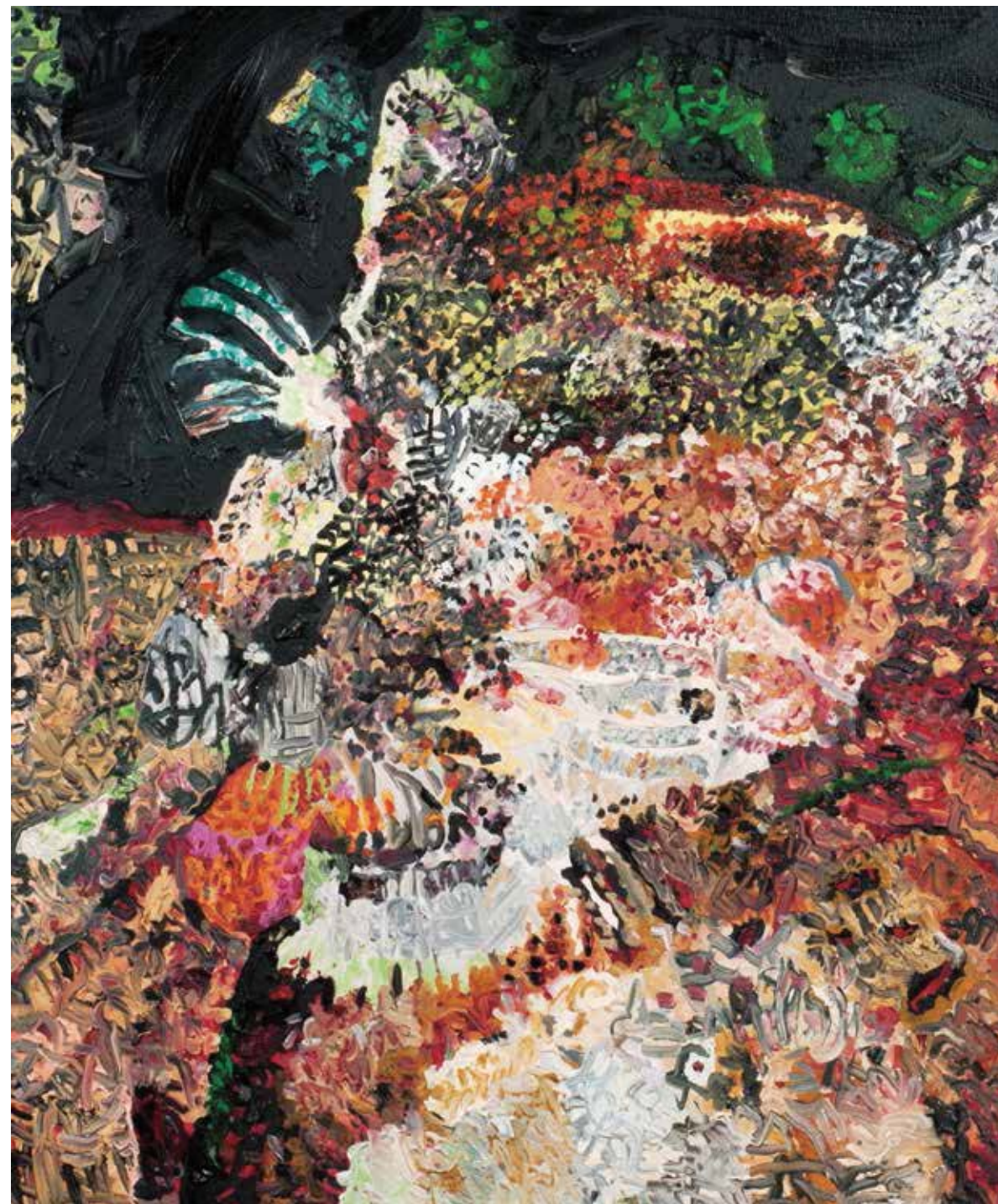
MAYUMI NAKAMURA

中村真由美

1985年生まれ。社会福祉法人わたぼうしの会たんぼの家アートセンターHANAに所属。自分の目でとらえたものを強い筆跡で描ききる。何事にも素直でまっすぐに邁進する姿が、画面からもよくわかる。幼いころから描きつけ愛着をもつ動物や人物のイラストは、油彩の作者とは別人のようだ。2004年より、たんぼの家で過ごすなかで、考えや想いを独自の表情や口まねで表現するようになった。その記憶は日々の日記に書きつづられている。

[主な出展歴・受賞歴]

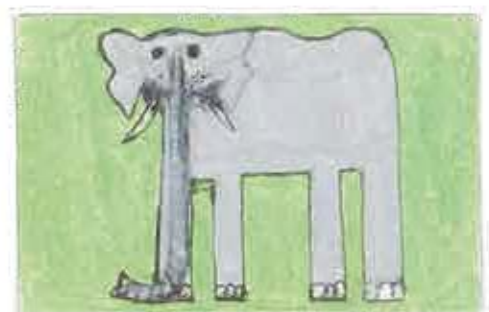
2006年 大阪府立母子総合医療センターへのパブリックコレクション(大阪)
2007年 「Art Link Japan」(フロリダ・クラフトマンギャラリー／アメリカ)
2012年 「違って独特」(京畿近代美術館／韓国)



《ブーマ》／2013年
油彩、キャンバス
606×500mm



《マゼランペンギン》／2011年
油彩、キャンバス
530×530mm



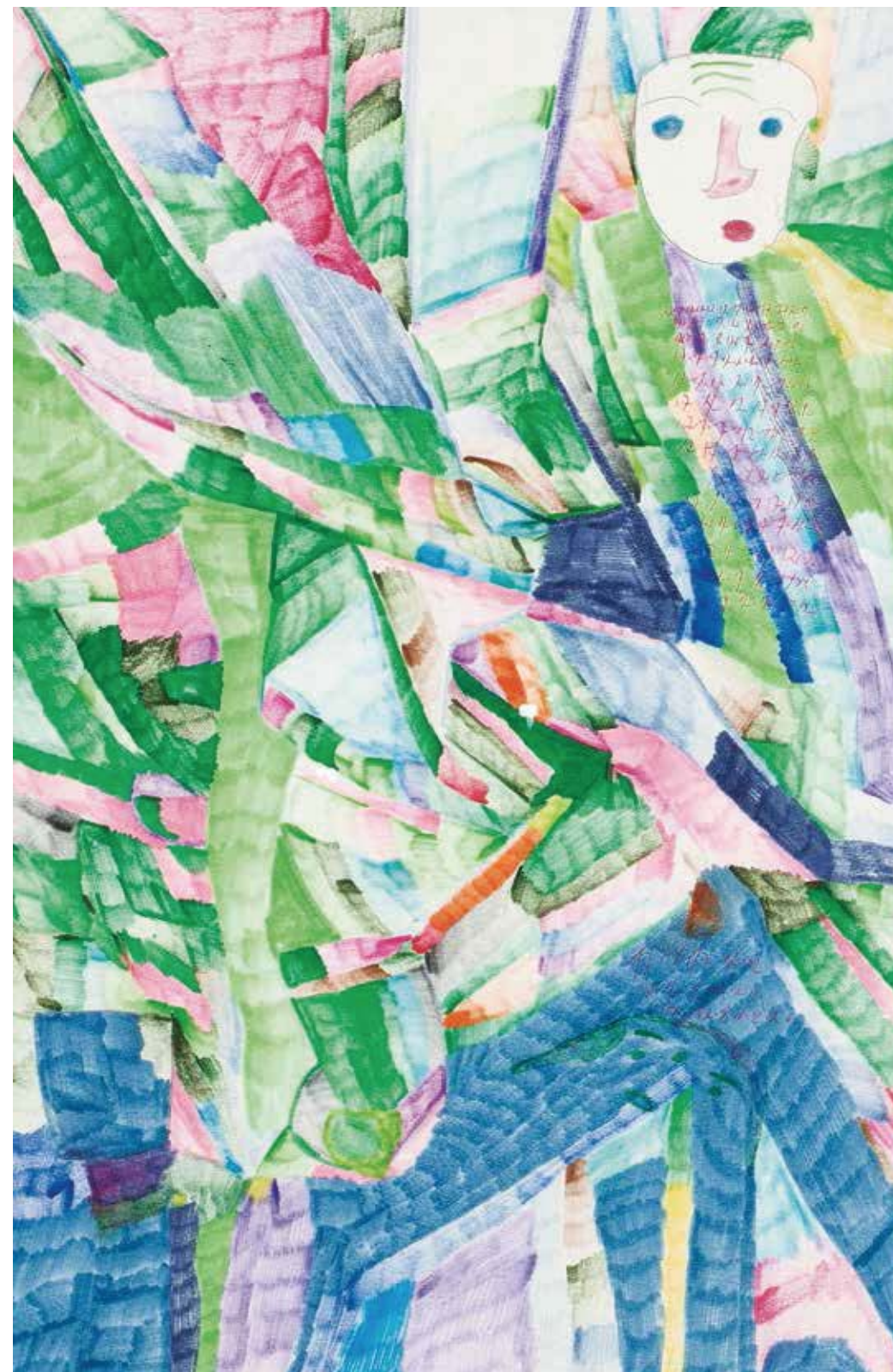
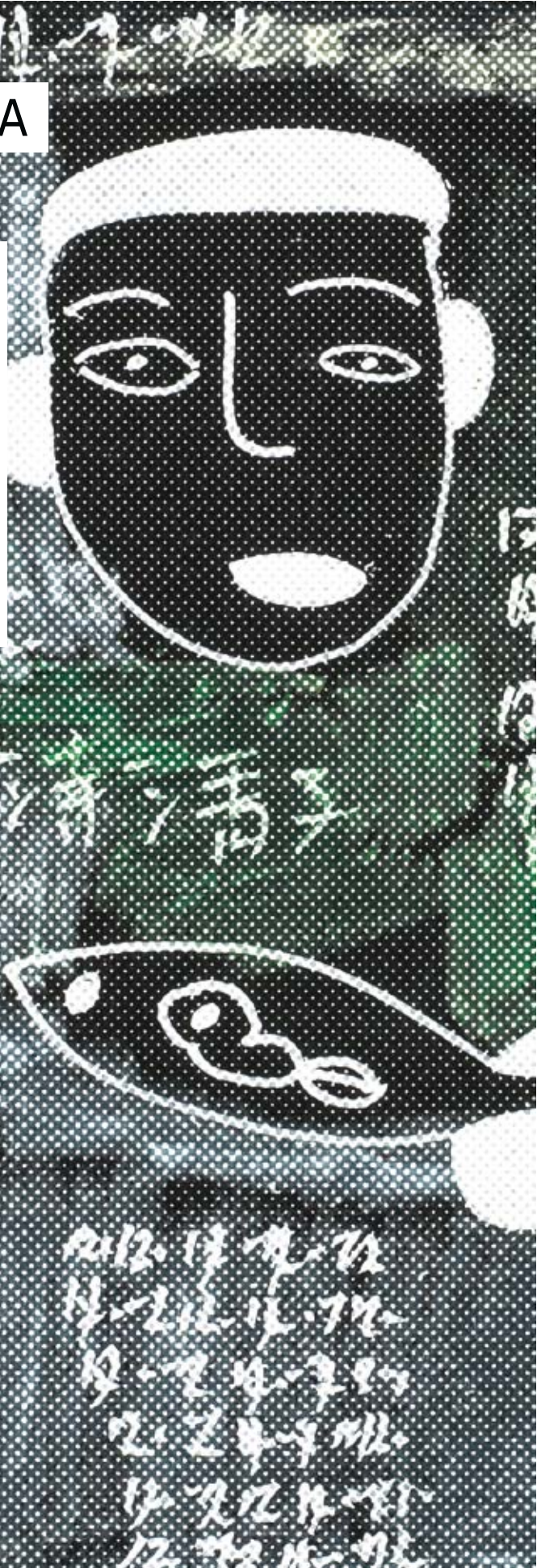
CHIEKO TAKADA

高田千恵子

1960年生まれ。社会福祉法人在友会フレンズまきばめぐり アトリエ創佳舎に所属。2012年より、フレンズまきばで生活をはじめると同時に、施設のことも、世間のことも知らないことだらけだった。新たな環境の変化のなかで、絵を描く楽しさに気づく。初出品したコンクール「かんでんコラボ・アート21」では、審査員特別賞を受賞、独特の文字と色彩感覚で周囲を驚かせた。気が向いたときだけ描く、という独自のペースで制作する表現者である。

[主な出展歴・受賞歴]

- 2011年 「かんでんコラボ・アート21」 審査員特別賞
- 2012年 「コラボ・アート21」 最優秀賞
- 2013年 個展「高田千恵子展」(天野画廊／大阪)
- 2014年 「韓・中・日障害者美術交流展」(ソウル市弘益大学現代美術館／韓国)



《冥夢百鬼夜行図シリーズ》／2014年
ボールペン、水性マーカー、カードボード
415×272mm



上:《冥夢百鬼夜行図シリーズ》／2014年
水性マーカー、クレヨン、カードボード
194×430mm

下:《冥夢百鬼夜行図シリーズ》／2014年
クレヨン、カードボード
278×396mm

ATSUKO TAKEDA

武田佳子

1957年生まれ。社会福祉法人わたぼうしの会たんぽぽの家アートセンターHANAに所属。猫を中心とした動物を愛し描いてきたが、浮世絵と出会い、人間に惹かれはじめる。油彩やパステルなどさまざまな手法に挑戦し、墨の表現に辿りついた。瞬発的に生まれる力強い線は、息のあうパートナーのサポートがあってこそ。命あるものを描き、自分の存在と重ねあわせることで、どう生きたいかを自らに問いつづけている。

【主な出展歴・受賞歴】

2006年 「Verge 2006展」(Brisbane Outsider Art Studio／オーストラリア)
2007年 「Art Link Japan」(フロリダ・クラフトマンギャラリー／アメリカ)
2013年 「小松和子・武田佳子二人展『花は咲きたい』」(高島屋大阪店・ギャラリーNEXT／大阪)



《ぼくは、ねこだ》／2001年
コンテパステル、紙
380×270mm



《女は愛嬌》／2004年
顔彩、墨、和紙
1400×590mm



《いのちII》／2004年
顔彩、墨、和紙
2000×830mm



《チャーミングなおかみくん》／制作年不明
顔彩、墨、和紙
844×597mm



《涙》／2006年
顔彩、墨、和紙
785×545mm

収録作品の魅力と背景について

宮下忠也 [アートディレクター]

障害のある人たちの作品は、私たちを惹きつけます。一度見たら忘れられないほど強烈なインパクトのあるもの、色彩のバランスが絶妙なものの、荒々しいタッチが印象的なものや思わず笑ってしまうほどユニークなもの、人間の本質を鋭く突いたものもあります。そんな興味深い作品が、福祉の現場からたくさん生まれてきているのです。

では、障害のある人たちの多くが、頭抜けた美術の才の持ち主なのでしょうか。私はいくつもの福祉施設や個人を訪問するなかで、そうではなく、彼ら彼女らの属する環境が創造性に富んでいるから、おもしろい作品が数多く生まれてくるのだと感じています。

障害のある人たちには多様性があります。一口に障害と言っても、その種類や程度は千差万別で、たとえ同じ障害であっても現れ方には大きな個人差があります。福祉の現場では、そのような個の多様性、つまり個性が強く認識される状況下で人と人が密接に関わり合っています。そこでは、互いの違いを認め受け入れることができるのかどうか、生活の質に大きく影響します。それは障害のある人、福祉施設職員の双方にとって非常にクリエイティブな実践であり、その努力が行われている場所に独創的な作品が生まれるのです。

本書で取り上げるのも、多様な価値観のもとで生み出された極めて独創性の高い作品たちです。なかには他者との関わりが重要な構成要素となっている作品や美術史から多くを学び制作された作品もあり、障害のある人たちの作品に用いられてきた「沈黙」、「秘密」、「孤独」、そして「独学」といったキーワードだけでは語ることが

できません。では、この10名の作品をどのように読み解くことができるのでしょうか。その魅力と背景について、これから簡潔に紹介していきたいと思います。

古谷 秀男 → p.28

どこか懐かしさを感じさせる異国情緒漂う景色のなかで、人間や動物たちが仲良く共生している姿。それがキラキラ輝くピンクやラベンダー、ターコイズブルーといった美しい色調と、シンメトリックな構図で丁寧に描かれています。画中の人物や動物たちは多くの場合、男と女が対になるように配置されており、また、花を贈り合うカップルの姿が繰り返し登場することからも、作品のテーマが「恋愛」もしくは「家族にまつわる物語」であると推察できます。

古谷はかつて、開拓移民としてブラジルで農場の仕事に従事していました。その後、33年間過ごしたブラジルを離れ日本へと帰国。しばらく各地を転々としながら、奈良の「太陽の家」へと辿り着きました。そして8年が経過したある日、古谷はおもむろに絵を描き始めたのです。

豊かな自然とゆったりとした時間のなかで交わされる愛の詩。それは、若き日々を過ごしたブラジルへの郷愁の念なのか、その地で築いていたという家族の思い出なのでしょう。

山崎 康史 → p.34

自転車が1台ボツンと置かれた庭、道端に停められている建設機械。どちらも人の営みを感じさせる風景ですが、そこに人の姿はありません。この絵の作者の山崎は、普段会話を交わしません。そして、絵を描いて

いる姿を人に見せません。言葉でのコミュニケーションを回避する彼にとって、自分を表現できる創作の時間と空間は絶対不可侵領域であり、一緒に暮らしている両親でさえ、彼が絵を描いているところを一度も見たことがないほどです。

そんな山崎の作品の技巧的な特徴は、画面全体が草や毛のような繊細なタッチでびっしりと覆い尽くされていることです。この技法は、動物の体毛や草原を表現する際に用いられるのはもちろんのこと、それとは異なるはずの空やのっぺりとした壁面にも使われます。つるつとした質感よりもふわつとした肌触りへの嗜好性から発展した描画法なのでしょうが、この触感を生み出すために、彼は膨大な時間と手間をかけます。そうして描きあげられた作品は、彼と家族の一番の宝物です。

山野 将志 → p.38

大胆な筆致、カラフルな色彩、細部を省略した簡潔な表現。まるで晴れた日の青空を思わせる、自由で伸びやかな作風です。動物や昆虫、植物を見ること、そしてそれらに触れることが大好きな山野は、その好きなものたちを大きなキャンバスに、好きな色を使って描きます。だからその楽しさが画面から元気に飛び出してきて、見ている私たちを楽しく晴れやかな気持ちにさせてくれるのです。

山野の作品を時系列に並べて見ると、初期の作品はモチーフの形状がはっきりと見て取れるほど具象的に描かれているのに対し、近作は一見何が描かれているのかわからないほど抽象的になってきていることがわかります。枚数を重ねるなかで表現の簡略化が進み、抽象度が高くなっているのです。より具象的な以前の作品と、抽象的な色合いの濃い近年の作品。そのどちらも、山野らしい魅力的な作品です。

伊藤 樹里 → p.44

伊藤は、薬の殻や鉛筆の削りカスなど、自身の生活と密接に関わる「大切なもの」を集め続けています。薬の殻は、ただのゴミと思って見ていると無味無臭の、どちらかというと冷たさを感じさせるモノに過ぎません。しかし、このちっぽけな物質は、種類によってさまざまに異なる色や形をもち、半透明のプラスチックとアルミ箔という材質のためキラキラと乱反射します。いくつかまとめて手にもったならば、カシャカシャと小気味よい乾いた音が鳴ります。

このように、薬の殻をよく観察してみるとモノとしての魅力があります。しかしそれで、薬の殻が大切なものになるわけではありません。この殻がゴミではなく宝物たる所以は、薬の殻を収集するという行為に込められた想いにあります。伊藤は、さまざまな薬を服用している友人や家族たちの姿を想いながら、その人たちとの友情の代替物として薬の殻を集めているようなのです。

本来はすぐに捨てられてしまうはずの小さなモノが集積し、巨大な塊になる。その非日常的な光景を目の当たりにしたとき、私たちは圧倒されます。それは彼女が収集するために費やした膨大な「時間」とそこに込められた「想い」の強さを、「質量」として見ているからに他なりません。

藤田 雄 → p.48

藤田には、何でも自分のものにしてしまう力があります。彼の手にかかると、誰が描いても似たりよったりのはずのウルトラマンやドラえもんでさえ、それと判別できるにも関わらず藤田独自のキャラクターに生まれ変わります。そしてその能力をフルに生かし、動物と数字を掛け合わせた独特のスタイルを生み出しました。それは見たらすぐに誰が描いたのかわかる、独創的な作品です。

絵の余白にはしばしば文字が書き込まれています
が、そのチョイスがまた絶妙です。特に好んでいるのが「実験室」と「婦人科医院」。どことなく刺激的なこの言葉を、隷書体のような特徴のある独自のフォントで繰り返し書き込んでいます。でもよく読んでみると、「じっけんしっ」や「じゃっけんしっ」といったようにあちこち微妙におかしなことに気づくでしょう。藤田自身が言葉遊びの好きなユーモアに富んだ人物であり、その人柄そのままのユニークな作品です。

若 杵 大 介 → p.52

若杵は自分の表現スタイルをもっています。人物や動物、貝殻、果物など、どのような対象物であっても、ほとんどすべて四角形の組み合わせとして描くのです。ならばどれも似たり寄ったりのワンパターンになってしまうかという点必ずしもそうではなく、モチーフの原形がかなり残ったものから極度に抽象化されたものまでバリエーションに富んでいます。また、遠目には同じに見える連作であっても、些細な違いがあります。その差異を見つけ出すこともまた、彼の絵の楽しみ方のひとつと言えるでしょう。

かつて、画家ポール・セザンヌは「自然を円筒、球、円錐としてとらえなさい」と語りました。この言葉はピカソに多大な影響を与え、キュビズム誕生の礎となりました。しかし、若杵ならばきっとこう言うに違いありません。「自然を直方体、立方体、四角錐としてとらえなさい」と。この美学は、絵画だけではなく彼が書く文字にまで徹底されています。

澤 井 玲 衣 子 → p.56

センスのいい配色、エッジの効いた線、リズムや間を感じさせる構図。具体的なかたちはほとんど出てきませんが、音楽や風景がテーマとなっています。特に音

楽に関しては、自身でピアノを演奏するほど親しんでおり、そのことがリズムミカルな画面構成に表れています。風景も、実際に訪れた場所を思い出しながら描くことが多く、その場特有の空気感といったものが感覚的に表現されているかのように感じられます。

白い画面に色鉛筆や水彩絵の具、墨の濃淡で描かれる澤井の作品は、とても繊細で儚さを感じさせると同時に、しなやかさ、芯の強さがあります。

中 村 真 由 美 → p.60

中村の油彩画を近くから見ると、油絵具特有のこってりとした質感と荒々しい筆致が目につきます。赤や紺、黒、茶色などの濃色が入り混じったその画肌は、グロテスクなほどの力強さに満ちています。しかし、そこから5、6歩後ろに下がったところから見ると、繊細に描写された動物や草花の像が鮮やかに浮かび上がってきます。彼女の作品と出会ったとき、見る距離によって印象が大きく異なることに驚きました。まるで2枚の別の絵です。

1枚の絵のなかに2つの異なる顔を併せもつ中村ですが、その創作活動の総体はさらに多様です。彼女の職場では、イーゼルに立てかけられた描きかけの油彩画のほかにも、ポップでキュートなイラスト、細かくした新聞紙を貼り合わせてつくられる丸みを帯びた動物の張り子など、テイストの異なる仕事が同時並行で展開されています。それぞれ見た目は異なるものの、人や動物へ向けられる眼差しの優しさなど共通する部分も多く、1人の人間がもちうる表現の幅広さを再確認させられます。

高 田 千 恵 子 → p.66

とぼけたような味わいのある表情をした人々。でも何を考えているのかわからないような怖さもあります。

背景には、日本語とは少し違うけれど所々解読可能な文字群が書かれています。そしてそんな作品に、《冥夢百鬼夜行図》という障害のある人のアートとしてはあまり見ない種類のタイトルがつけられています。

高田の創作活動には、施設職員である小野寺の存在が欠かせません。彼女の作品のユニークさを評価し、制作スペースの確保や画材の提供、作品の発表など、活動全般をサポートしています。作品にタイトルをつけているのも彼です。

障害のある人たちの作品は、しばしば小野寺のような理解者との共同作業によって生み出されます。しかしそれを発表する際には、サポートする人間がいることで作品の自律性が損なわれるのではないかという危機から、そのことを明示しないケースが多々見受けられます。しかし美術界においても、アーティストがたった1人で活動しているわけではなく、サポートしている人間がいるものです。真に気にしなくてはならないのは、協力者の存在の有無ではなく、障害のある表現者とサポートする側との間にしっかりとした信頼関係が構築できているかどうかなのです。

武 田 佳 子 → p.70

武田はその長い画業のなかで、幾度か作風を変えています。はじめは油彩画を描いていましたが、脳性マヒに伴う二次障害のため絵筆を操ることが難しくなりコンテを使うようになります。そして、現在は主に墨を用いて制作しています。画題も、かわいらしい黒猫から妖怪や爬虫類へと変わりました。武田はあえてそのようなモチーフを描くことで、忌み嫌われているものたちも、人間と同様にさまざまなことを感じながら生きている、ということ表現しようとしています。

彼女の代表作とも言えるシリーズに、墨描きの女性像があります。互いを傷つけ合う人間の本性を好まず人を描けなかったところから、浮世絵の人物像に魅了

され模写を繰り返すうちに人間への関心を深め、オリジナルの作品にまで発展させていったのです。強い眼差しでこちらを見据える女性たちは、身体障害をもちながら生きることと真摯に向き合う武田の姿に重なります。

生きることは変わることです。彼女は2014年の高島屋大阪店ギャラリーNEXTでの展覧会に際して、次のような言葉を残しています。

「いろんな方に支えていただき30年描いてこれました。体は動きにくくなってきたけど、体にあった画材で描き続けていこうと思います。(中略) 山口百恵はマイクを置きましたが、わたしは筆を置きません。」

さて、いかがだったでしょうか。ここに記したのは、アートディレクターとして障害のある人たちの作品と関わってきた私の見方です。きっと本書を手にした人それぞれの視点から、いくつもの異なる解釈が導き出されるでしょう。さまざまな視点から多くのことが語られるならば、作品に対する理解はより深まっていきます。本稿がその一端を担えることを、嬉しく、誇らしく思います。

もうひとつの見方

- 奈良の障害のある人たちの表現 -

発行日：2015年3月31日

発行元：一般財団法人たんぼの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501

Email artsoudan@popo.or.jp

URL <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

監修：阿部こずえ、岡部太郎、森下静香（一般財団法人たんぼの家）、宮下忠也

編集ディレクション & 編集：多田智美（MUESUM）

編集：永江大（MUESUM）

アートディレクション：原田祐馬（UMA/design farm）

デザイン：西野亮介（UMA/design farm）

撮影：濱田英明（pp.10-26）、藪本絹美（pp.28-75）

印刷・製本：株式会社山田写真製版所

*本書は「平成26年度 障害者の芸術活動支援モデル事業（厚生労働省）」の一環として制作しました。



小
木

- ①
 - ②
 - ③
 - ④
 - ⑤ 新聞紙を貼ったものにペンキをぬります。
 - ⑥ えんぴつで書き出し、ホスカでぬります。
 - ⑦ 色をぬります。
- ↓
- ⑧ スタッフにちなおし、ニスでぬってもらい
完成です。

ハリモホニカバ
ウナギ タコ
サメ ワニ
カハ